

2. バレエ組曲「シルヴィア」 作品16 (ドリーブ)

ドリーブ (Clément Philibert Léo Delibes : 1836~1891) は、フランスの作曲家である。パリの音楽院で作曲を学んだのち、オペラ座において伴奏者などの裏方を務める中で、オペラやバレエの作曲を始めた。こうして生まれたドリーブのバレエ音楽は、それまでの単なる「踊りの伴奏」の域を脱し、情景や登場人物の心の動きなども表現した芸術性の高い「音楽作品」となった。そのことからドリーブは「フランス・バレエ音楽の父」とも称されている。「シルヴィア」は、人間と妖精との禁断の恋を描いた全3幕のバレエである。

パリ・オペラ座で初演が行われた1876年には、チャイコフスキが『白鳥の湖』を完成させている。

あらすじを簡単に説明すると、

羊飼いの青年アミンタ (人間) は、狩りの女神ディアナに仕えるシルヴィア (妖精) に思いを寄せている。人間と妖精との恋愛は許されるものではなかったため、シルヴィアはアミンタには興味を示さない。その様子を見た愛の神エロスが、そんな二人を近づけようとして矢を放ち、その矢がシルヴィアに刺さる。すると、シルヴィアにアミンタへの恋心が芽生える。「キューピットの矢」といったところだろう。同じくシルヴィアに思いを寄せ、彼女を我がものにしたと目論む狩人のオリオンが、シルヴィアを連れ去り監禁する。そこにエロスが現れ、シルヴィアを救出して、アミンタの待つディアナの神殿に連れてゆく。神殿では酒の神バッカスをたたえる祭りが催され、そこで再会した二人は、エロスの計らいによってディアナから交際を認められ、結ばれる (めでたしめでたし) というファンタジーである。

本日は、26曲で構成されるバレエ音楽から7曲を抜粋し、一部を切れ目なく編纂しているため、全4曲として演奏する。

第1曲 前奏曲 — 狩りの女神

この曲は、第1幕の第1曲と第4曲で構成されているが、“つなぎ”として第3曲「羊飼い」の終結部が使われている。

「前奏曲」の後、幕が開く。アミンタがシルヴィアを想っていると (「羊飼い」)、ディアナに仕える妖精たちが狩りから勇壮に戻ってくる (「狩りの女神」) 場面である。

第2曲 間奏曲 — 緩やかなワルツ

この曲は、第1幕の第5曲と第6曲で構成されている。

狩りで疲れた妖精たちがまどろむ (「間奏曲」) 中で、シルヴィアが甘美な舞を披露する (「緩やかなワルツ」) 場面である。

第3曲 ピッツィカート

この曲は、第3幕で繰り広げられる「ディヴェルティスマン」の第1曲である。

ディヴェルティスマンとは、『くるみ割り人形』での「お菓子の精たちの踊り」や、『白鳥の湖』での「世界各国の踊り」のように、多彩な踊りを次々と披露する場面のことである。

第4曲 行進曲 — バッカスの行列

この曲は、第3幕の第1曲と第2曲で構成されている。

村人がディアナの神殿に集まって (「行進曲」)、酒の神バッカスをたたえるお祭りを催す (「バッカスの行列」) 場面である。